

いうのは英国と米国だけでなく、もっと広い読者層の獲得を意味します。そして、所長裁量経費などで、別の言語での翻訳企画の支援もしております。あるいは客員研究員の方の中には、四言語以上の言葉に通じている方もいらっしゃいます。そうした方々のご協力を得て、それぞれのご経験を踏まえた興味深いエッセイをここに掲載することが出来ました。味読頂けましたら、幸いです。

(国際日本文化研究センター准教授)

## 〈翻訳〉の耐えられない不純さ

三原 芳秋

思えば、日文研との〈コンタクト〉は、いつも「複数言語のはざま」にあったような気がします。最初に桂坂を登ったのは、磯前順一さんが主催した大規模な国際会議「京都学派と『近代の超克』―近代性、帝国、普遍性」における同時通訳を依頼されたときでした(『日文研叢書 四七』に結実した国際会議です)。国連安保理のような立派な会議室を見下ろす同時通訳ブースに二日間監禁され、英語と日本語の〈はざま〉で自分の主体性が喪失していく、という壮絶な体験をしました。二度目は「木曜セミナー」で、堀まどかさんの野口米次郎論へのゲスト・コメンテーターとして、お呼ばれしました(堀さんによる報告文が『日文研』五一号に

載っています)。野口米次郎「ヨネ・ノグチは、いうまでもなく「複数言語のはざま」を生きさせた「二重国籍」詩人で、詳しくは堀さんの大著を紐解いていただければよいと思いますが、その日も、外国人研究者の方が日本語で質問を始めておいて途中で英語に切り替える（どちらも「母語」ではないのでしょうか）というような場面がありました。その後、縁あって昨年度より、稲賀繁美さんの共同研究班にysteしていたくようになり、こちらは「海賊船団」ですから、定義からして「へはさま」で悪戯をする集団「なわけです。学務多忙につきなかなか研究会に参加できず、なぜか飲み会にだけ出没する幽霊班員（幽霊船？）のような存在だったので、夏期休暇中に研究会を一回任せていただいた際に、「人文学の生態学的転回のために」と題して、さまざまな分野の友人を集めてミニ・シンポを主催させていただきました。人類学者が「ペルソナ」を、言語学者が「人称」を、文学理論家が「擬人法」を、哲学者が「人格」を、コミュニケーション学者がマルチモーダルな「自己」を語る……つまり「環境（環世界）」における「Person」について、それぞれがそれぞれの（学問）言語で語り合うという、これもある意味で「複数言語のはざま」を具現化したような、言ってみれば海賊船に乗りこんで「不純異分野交流」をやってしまった感じです。もともと「よそさん」のわたしは、ご多分にもれず、日文研というと、「国粹」とまではいかずとも「純粹」を奉ずる組織に違いない、という偏見を持っていたわけですが、少なくともわたし自身の〈コンタクト〉からみるに、そこそこ〈不純〉なところのようです。

さて、「国際的とはなにか―複数言語で日本を思考することとは？」という御題をいただいております。とくに、翻訳論・ポストコロニアル研究の観点から、という但書つきで。「翻訳論」といっても、もちろん翻訳実践の技術的な話ではなく〈理論〉的な方面から書きたいと思

うのですが、理論的・思想的「翻訳論」として、間違いなく「乗り越え不可能」な地点を示したのは、ユダヤ系のベルリン市民で三〇歳になるかならないかという若者が書いた「翻訳者の使命」(一九二三)というエッセイです(『ペンヤミン・コレクション』(二)『ちくま学芸文庫所収』)。なにが「乗り越え不可能」なのかというと、これが「翻訳論」であるにもかかわらず、「言語Aから言語Bへの翻訳」といった個別的な場面トポスには目もくれず、「メシア的終末」において「諸言語が互いに補完しあうもろもろの志向の総体によってのみ到達しうる」という、えたいの知れない「純粹言語(die reine Sprache)」なるものに準拠した立論であるために、それを「オカルト的」として却下するか、さもなければ、その(ヴァーチャルな)「一性」≪全体性≫を丸ごと鵜呑みにする(または、まるごと鵜呑みにされる)しかないのです。ただ、そこまで大仰にかまえずとも、「純粹言語」なるものを措定することによる実地的な「効用」を考えてみることもできるでしょう。もしも、≪純粹≫な言語が唯一のものであり、「メシア的終末」に至るまではけっして全面的には現実化(actualize)しない潜在的(virtual)な≪全体性≫であるのならば、現実存在する「言語A」やら「言語B」やはすべて≪不純≫だということになります——≪不純≫という言いまわしに抵抗があるならば、「あらゆる≪純粹≫性の主張(虚構)に抵抗する」と言ってもいいでしょう。いかなる言語も、他者との関係なしに≪純粹≫な自律的アイデンティティを持つことにはない——つまり、「全ては関係性のうちに」ということです。そうすると、≪純粹≫な原作と≪不純≫な翻訳」といったクリシェを疑問視することができるようになる、という効用があります。

「日本(語)」が世界に誇るべき平和憲法やノーベル賞作家の小説を「翻訳のような文章」

といって貶す粗暴な人をしばしば見かけますが、これも、あまりに素朴な〈純粹〉性への信仰にもとづくクリシエにすぎない、と言えるでしょう。小説を書くための準備として外国語のテキストを読む習慣があるという大江健三郎は、「外国語と日本語との間を自分で往復する。そうやって言葉の往復、感受性の往復、知的なものの往復を味わい続ける作業が、とくに若い人間に新しい文体をもたらす、と私は考えています」（『読む人間』）と書いています。偉大なテキストはつねに外国語で書かれたようだ、とブルーストも言っていますし、小林秀雄が西田幾多郎の「日本語では書かれて居らず、勿論外国語でも書かれてはいないという奇怪なシステム」（『学者と官僚』）について語った際にも、そこには老哲学者の「悪戦苦闘」への深い畏敬の念（および文体模写するエピゴーネンたちへの蔑視）があったことに疑いはありません。また、ドイツ民族のための国粹主義的アンソロジー制作に際して助言を求められたゲーテが、そこに翻訳詩を含めるよう提案した話は有名ですが、かの折口信夫（釈迦空）ですら、ある種の転換期における翻訳詩の文体的重要性を強調していた（『詩語としての日本語』）ことも忘れてはなりません。

ベンヤミンの比喻で言えば、原作も翻訳もともに、「〔純粹言語〕という」ひとつの器の「破片」であって、ちょうど考古学者が発掘した破片を嵌め合わせて縄文土器を〈復元〉するように、原作と翻訳が「愛をもって細部に至るまで」協働することによって、けっして完全に〈復元〉することはない、しかしその分かえって無限のエネルギーを発しているかのような「ひとつの器」を、「志向 (Intention)」のうちに「救済」するのです。言語Aやら言語Bやらの〈純粹〉性という虚構を退け、むしろその〈不純〉さを耐え抜く (überstehen) ことによっ

て、あらゆる言語の〈不純〉さのなかに潜在する「純粹言語」の力 (potentia) を「解放」すること——これこそが、「翻訳者 (Übersetzer) の使命」ということになりました。

言語や文化を語るとき、ことに「複数言語のはざま」で語るとき、わたしたちはしばしば、知らず識らずのうちに、この「純粹」性という虚構の甘い罠にはまってしまおうようです。留学先や国際会議の場において、外国語で「日本」について語るとき、よほど慎重にならない限り、ガヤトリ・スピヴァクの言う「悪しき人類学の仮定」すなわち「ある文化から来た者は皆、その文化の完璧な事例以外のなものでもないという仮定」(「翻訳の政治学」) から逃れることはむずかしいでしょう。つまり、「わたし」が「あなたがた異邦人」にたいして「日本語・文化」を「表象 || 代表 (represent) する」と言った瞬間に、〈純粹〉な「日本」(そして、「純粹」な日本のわたし) が現に存在する (present) という虚構が作動しているのです。「国際的」という発想にも、同様のカラクリがあるように思えてなりません。自律的で〈純粹〉な〈一〉としての「国民的なるもの (national)」が、一十一十……と足し算して「国際的 (inter-national)」となる。「国際的」に代わって(？) 昨今「グローバル、グローバル」と世間は喧しいようですが、同じような〈足し算〉式の発想では、これほどつまらないことはありません。むしろ、地球 (globe) という「ひとつの器」|| 〈全体性〉を措定して、そこではあらゆる「破片」が「複数・複合的 (multiple)」で「異他的 (heterogeneous)」、すなわち耐えがたいほどに〈不純〉である、という〈微分法〉式の(？) 発想の転換がなければ、意味がないように思えます。「複数言語のはざままで日本を考える」を、『日本』もまた、つねに・すでに〈複数的〉な〈はざま〉そのものである、と考える」に読みかえること。「一十一十……」ではなく、「一即多・一即他」。

〈翻訳 (translation)〉の場面とは、まさに、「純粋」性の「異」にもっとも陥りやすい難所であるにもかかわらず／であるからこそ、この「発想の転換 (transformation)」をもっとも先鋭的に行うことができる「穴場」であるとも言えるでしょう。「言語Aから言語Bへの翻訳」——もはや「言語」を「文化」に置き換えても良いでしょう——と言われると、堅固な城壁に護られた城塞都市 (Burg) Aから別の城塞都市Bへと書簡 (letters ≡ 文字) を届ける、白馬にまたがった「国王の使節」といったイメージを持たれるかもしれませんが、ところが、ベンヤミンが持ち出す比喻は、「奥深い森 (Bergwald)」なのです——田園都市に造成される森林公園といったものではなくて、粘菌から祖壺まで魑魅魍魎が曼荼羅をなす「縄文の森」。しかも、ベンヤミンの〈翻訳者〉は、その「奥深い森」の内部に安住するのではなく、森の縁に立ち、外部から、そのどこまでも深い森の奥を凝視し、どこからともなく鳴り響いてくる（「純粋言語」の）「こだま (Widerhall)」に聴き耳を立てています。「こだま」に〈起源 (Origin)〉はなく——それは、いつも、反復 (wider) なのですから——あるのは、いつのまにかの（複数・複合的な）〈始まり (beginnings)〉ばかりです (Origin と beginnings とは対概念は、「ポストコロニアル思想家」と名指される以前のエドワード・サイードが、自らの思想のために見出した〈始まり〉のトポス≡トピカです)。

「日本」を堅固な城壁で囲んで〈純化〉したうえで使節団を各地に派遣するのではなく、境界石もおかれていない「奥深い森」の「縁」で有象無象が〈不純〉な〈コンタクト〉を企てる——「日本」をも「異邦」とみなし、「異邦の [fremde] 言語の内部に呪縛されているあの純粋言語」を「救済する」という〈翻訳〉の希望に貫かれながら——そんな「コンタクト・ゾーン」としての「日文研」であってほしい……と、「よそさん」のわたしが、まことにおこがま

しい限りではありますが、わずかながらの日文研との〈コンタクト〉の経験から来る期待をこめて、そう述べさせていただきます。

補注…「コンタクト・ゾーン」とは、メアリ・ルイーザ・プラットが（未邦訳の）著書 *Imperial Eyes* (1992, 2008) において展開した概念で、「異文化間交渉（衝突・交流など）」を考える際に、それら「異文化」が、出会う以前からすでに確固たる自律的な〈主体〉を有していると想定する従来のモデルから、むしろ「コンタクト・ゾーン」という場トポス面において、そこで生じた〈コンタクト〉という事象の結果として、〈主体〉なるものが構築されるというモデルへと、発想の転換をうながすものです。キーワードは *transculturation* という専門用語ですが、本エッセイでわたしが描こうとした「〈翻訳 (translation)〉の理念」へと「翻訳」していただいても、けっこうかと思えます。ちなみに、プラット当該書の舞台は西洋人が奥深くまで入りこんできた南米ですが、「日本」についてなら、奄美から列島を眺める島尾敏雄が幻視し谷川健一や岡本恵徳が論じた「ヤポネシア」の視点や、日露ふたつの帝国という万力によって締め上げられた「アイヌモシリ」と呼ばれる大地ツインに身を置くテッサ・モーリス・鈴木『辺境から眺める』（みすず書房）視点、ほかにも、海民たちのダイナミックな移動・交流から環「日本海」世界を描く網野善彦らの「日本」史——それを言うなら、ナマコの眼で眺め、エビスの耳で聴く「日本」だってある——などが参考になるでしょうか。わたしが比較的詳しい「ヨーロッパ」で言えば、たとえば、一二・三世紀のトレド（カステイリヤ王国）やパレルモ（シチリア王国）が好例で、文明の〈はざま〉に位置するこれらの地域は、世界史的・地政学的偶然により、先進的なイスラーム文明と後進地域「ヨーロッパ」との奇跡的なまでに豊饒な〈コ

ンタクト〕が生じる場となり、アラビア語によって保存・発展せられた（「ヨーロッパの（起源）」とされる）古代ギリシャ発祥の諸学——といっても、そのほとんどがイオニア植民地（現在のトルコ）という「コンタクト・ゾーン」に（始まり）を有するのですが——をラテン語に移す「翻訳センター」が営まれることになりました。そこは、異教徒にも寛容なイスラームの知識人たち、必死にアラビア語を学ぶ進取の気性に富んだキリスト教の学徒たち（今日でいえば「グローバル人材」でしょうか？）、そして、就中ユダヤ教徒ほかの故国喪失者（*exile*）たちが、ところせましと活躍していた——まさに「コンタクト・ゾーン」そのものだったのです。

（同志社大学准教授）

## ヨーロッパの多言語的アプローチ 複数言語のはざまから日本と宗教学を考える

エリザベッタ・ポルク

私はマルチリンガルな環境で育った研究者です。大学教育はイタリアで受け、イギリス、スペインで勉強を継続し、ドイツ、インドに留学し、ドイツのマールブルク大学で宗教学（日本宗教）の博士号を取得しました。その間、イタリア語、ドイツ語、英語の教員国家資格を取